

基で、江戸に於いて内藤喜齋が前田利常に寺地を請ひ、今の所に造立したとある。

ケンモンジマへ 玄門寺前 金澤の舊町名。卯辰玄門寺の前通りをいうたが、明治四年四月戸籍編成の際下小川町とした。

ケンヤクブギヨウ 倭約奉行 御馬廻頭等、御歩頭以下物頭、又は組外・定番御馬廻頭御番頭より之を兼ねた。其の起原は明らかでないが、前田綱紀の時代山崎半左衛門延隆の命ぜられたのが始であらう。山崎の江戸に在る間は小寺平左衛門久孝が勤めたといふ。此の後中絶し、正徳四年七月十一日青地蔵人齊賢・長屋八郎右衛門昌倫兩人が命ぜられ、其の後罷められた。吉徳の時享保十三年六月十七日由比五郎左衛門勝尹・前田源兵衛和唐稻垣興三右衛門秀堅・松原善右衛門一親・大橋又兵衛信成の五人が命ぜられ、是より格合改り以後迎編したが、天明五年の改法につき、九月晦日役儀を御用人へ引續き、一時當役を廢した。寛政元年十月三日再び岡田太郎右衛門正直・井上勘助和崇・芝山十郎左衛門正方・榎尾基助直道・青木興右衛門貞珉の五人が命ぜられ、享和三年七月十七日に至つて重ねて罷められ、即日御省略方御用を置いて之に代へた。

ケンユウ 顯祐 諱は教秀。權少僧都。父は權大僧都實顯、母は河内顯照寺蓮淳大僧都の女。公名兵部卿。兒實照の後を受けて、江沼郡超勝寺を齎したが、永祿中越前に歸り、藤島の超勝寺を再興し、文祿二年六月示寂した。

ケンユウ 兼祐 ↓レンコウ 蓮綱。

ケンライジ 遷來寺 鹿島郡能登部下後山

分在つて、眞宗東派に屬する。

ケンリユウ 堅隆 ↓ショウガクケンリユウ 紹嶽堅隆。

ケンリユウ 元隆 ↓ホウサンゲンリユウ 保發元隆。

ケンリユウイン 見龍院 大聖寺藩主第十一代前田利平の法號。詳しくは見龍院存誠洗心大居士。

ケンリユウジ 賢隆寺 石川郡鹿島に在つて、眞宗東派に屬する。明治十一年八月寺號公稱の許可を得た。

ケンリヨウ 兼了 ↓ジツゴ 實悟。

ケンリヨウイン 賢良院 加賀藩主第十二代前田齊廣の子延之助の法號。詳しくは賢良院文雄延明居士。

ケンリヨウコウシオヤウ 賢良公子御夜話 賢良公子は前田齊廣の子、通稱延之助で、天保五年十四歳にて歿した。この書は侍臣金谷多門が公子の言行を録したものである。

ケンロクエン 兼六園 (一)園内の兩分一兼六園は大正十一年三月内務省から名勝として指定せられた地で、面積三萬有餘坪を算し、もと金澤城に屬した外園である。しかし最初から之が渾然たる一區劃をなしたものである。今園内を一巡する者の誰でもが注意するやうに、この園内は北方の斜面區域と南方の平面區域とに別れて居り、その間を限つて文政以前に一條の道路が通じて居た。道路の位置は、厩坂を真直に登つて、園内の商品館のある所を通り、霞池の中央を横きりつ、石川門の正面と尻垂坂の上とを連絡する道路の中央に出たものと考定したい。このこととは延寶の地圖によつて想像せられる所であるが、今假にこの線によつて西北區と東南區とに分ち、その西北區の方から沿革を記さう。

(二)江戸町―慶長六年徳川秀忠の女珠姫(後に天徳院)が前田利長の世嗣利常に入興する爲下國した。この時御附家老興津内記、用人由比民部・矢部所左衛門・矢部覺左衛門を初として隨從の徒數百人に及んだが、内記のみ城内新丸に住し、他は皆この西北區に設けた長屋に居らしめ、その所を江戸町と稱した。然るに夫人は元和八年に逝去し、隨從の者も歸東したので、賃長屋も恐らく荒廢したことであらうが、この附近は常に一時的に居住する者の爲に使用せられたことと思はれる。といふ譯は、彫金工後藤理兵衛程乘が京から下つて藩用を勤める際矢張りこの賃小屋に置かれたからである。素より建物は天徳院隨從の臣の居た所のものではなく、位置も西北區中では南寄りの道路に近い所であつたらしい。程乘の來たのは寛永の終頃であつたが、その附近を程乘屋敷といふことは後年まで傳はつて、寛文十二年には後藤程乘御賃屋敷地の垣を造る材料が必要であるといふ通牒があつたり、元祿九年には藩侯前田綱紀が厩程乘屋敷に出かけられるから、下々の輩はその後道を通つてはならないといふ布令があつたりする。この場合にはその地域を程乘屋敷の名で呼び慣はせたもので、決して程乘の居た賃小屋がその頃まで殘存してゐたわけではあるまい。

(三)江戸町御亭―江戸町の舊地には萬治二年七月、もと城内新丸に在つた作事場が移し建てられた。之と略同時に作事場附近に離亭があつたと思はれる。寛文五年伊豫西條の城主一柳直興が罪を得て金澤に謫せられた時、彼を置く建物が廣岡村に竣功するまで、假にこの離亭に拘留せられたとあるからである。次いで延寶四年九月作事場を城内に復してその跡に藩侯の別墅が設けられ、江戸町御亭と呼ばれた。奉行は金子安左衛門・中村兵左衛門であつた。寛文中にあつた離亭は取除かれて、地域の擴大と共に建築を新たにしたのである。この江戸町御亭で延寶六年十二月二日初めて老臣を饗せられた。この日召されたものゝ中、本多安房政長・横山左衛門忠知・前田對馬孝貞・奥村因幡府殿・奥村伊豫榮尚は御座敷で饗應に與り、終つて一町許を隔てた泉水際の數寄屋で口切の茶を賜はつた。多賀直方・生駒直政・菟城昌俊・菊池知辰も亦數寄屋で、奥村兵部・横山志暉は御勝手で御茶を受けた。この記事は江戸町御亭が可なり宏壯な建築であつたらしいことゝ、泉水際の數寄屋といふのがあることによつて、今の瓢池が既に造られてゐたことゝを推考せしめる。里村法橋昌隆に『延寶八年二月二十八日御庭に出で馬場の御亭に於いて、池にすむ龜の尾山か木々の春』の吟があるのも亦このこと、江戸町跡に調馬場が設けられて居り、そこにも御亭があつたのであらう。

(四)蓮池御亭―下つて貞享三年八月十五日前田綱紀は老臣をこゝに召し、自ら鷹野で得た雁を饗した。この時本多安房政長・前田佐渡孝貞・奥村豊岐藤輝・奥村伊豫時成に御茶を下され、御料理・後段の御茶が終つて御庭の見物をしたが、所々の御亭に御菓子等の節物が多かつた。その後御花品を見物、幕府から拜